

20世紀初頭の優生学における遺伝論と環境論の連続性 —C・W・サリービィの「予防的優生学」を手がかりに—

鶴田 陽香（本学言語社会研究科博士後期課程）

本発表は、20世紀初頭のイギリスにおいて展開された親が摂取したアルコールの子（孫）に対する有害性の有無をめぐる論争に着目し、C・W・サリービィという優生学者が従来の優生学研究において見落とされてきた理由を明らかにすることを目指した。発表題目とは力点が異なるが、今回の発表では、当時、一定の影響を持ちえたと考えられる優生学者が従来の優生学研究において重視されてこなかった要因の考察に焦点を当てた。

イギリスの優生学が、生物測定学者（統計学者）の優生学を中心に据える問題設定によって理解されてきたことが、サリービィが見落とされてきた一因であるということが本発表の趣旨である。

イギリスの優生学は、「優生学」(eugenics)という造語の生みの親であるフランシス・ゴルトンを起点に語られる。優生思想を統計学によって裏書きすることで「科学」へと昇華させるゴルトンの試みは、その弟子カール・ピアソンが生物測定学として数学的・統計学的により高度に発展させた。従来の研究は、この統計学によって裏書きされた優生学を中心に記述されてきた。

はじめに、親が摂取したアルコールの子（孫）に対する有害性をめぐる論争を概観し、この論争が厳格な遺伝論を支持した生物測定学と、環境論を取り込んだラマルク主義優生学 (Lamarckian eugenics) の対立であり、争点はアルコールによる獲得形質の遺伝の有無であったことを確認した。

そのうえで、統計学に裏書きされた優生学を唱える生物測定学者にとって「科学的」とは、すなわち「統計学的」と同義であったことを確認した。加えて、生物測定学者ピアソンは、彼自身のような大学内部の学者のみが諸社会問題に対する偏見から逃れ、学問的に正しく、客観的な研究をなしうると考えていたことに言及した。一方で、環境論を取り込んだサリービィは、優生学を裏書きする「科学」として統計学よりも生物学や病理学を重視した優生学者であり、熱心な活動家であった。ゴルトンを起点として生物測定学者（統計学者）の優生学を中心に据える問題設定は、大学や研究機関といった生物測定学者たちが「科学」としての優生学を生産する場の外部で統計学にもとづかない主張を繰り返す優生学者を、周縁に追いやることに帰結してしまう。この問題設定を、先行研究においてサリービィが見落とされてきた一因として提示した。同時に、サリービィの優生学は環境的・社会的要因の影響を認め、社会政策とも共存しうる穏健な優生学であったことから、政策決定者に受け入れられていたことにも言及した。

質疑応答では、多くの貴重なご意見とご指摘をいただいた。本研究の現代的意義や現代との接続については、アルコール飲料につけられている妊産婦に対する警告表示を例として挙げ、サリービィの優生学についての考察は、現代において優生学以外の名のもとで展開されている優生学を具体的に把握するための手がかりになりうると回答した。また、サリービィが実際に行使しえた影響力や政策への関与の詳細については、調査・検討の途上にあるために明確な回答をすることが叶わなかった。これについては、今後の課題とさせていただきたい。